

障害児教育における新型コロナウイルス関連問題検討会報告書

全国障害者問題研究会鳥取支部

I 検討会の概要

●研究の概要

目的：コロナ感染拡大防止のための長期に渡る休校措置は家庭・子どもに甚大な被害をもたらし、学童保育、放課後等デイサービスにも深刻な負担を強いた。その実態はどうなっているのか。厳しい感染が及んでいない地域だからこそ、その調査を担う必要があるだろうと、全障研鳥取支部は全国の知己に呼びかけリモート研究会を3回開いた。その内容を報告するのが、本研究の目的である。

資料：「昨年末に発生した新型コロナウイルスはパンデミックを起こしました。我が国においても2月末の首相会見において学校への休校要請が出され、3月から全国で休校措置がとられる事態となりました。その影響は療育現場、教育現場、福祉現場など大きく社会全体に及んでいます。また、災害時の避難をどうするかといった新たな課題も出始めています。現在は感染の波が落ち着き、緊急事態宣言が解除されたものの、専門家からは感染の第2波・第3波到来の危険性が叫ばれています。そのような状況の中、感染者数が少なく落ち着いているように見られる鳥取県においても、休校中の家庭でパニックを起こす生徒の事例や、希望していた就労が困難になる事例などの話を聞きます。特に障害児者が困難な状況に陥っているのではないかと危惧されます。そして、休校期間の長引いた都市部では、より厳しい状況があったのではないかと容易に想像されます。そこで、鳥取支部では zoom を用いたインタビュー調査を行い他県の状況を把握することを通して、今回の事態の課題を検証しようと考えました。各地の情報を交流しながら、今後同様の事態が起こった場合にも備え得るような情報を収集し、まとめていきたいと思えます。」(第1回要項より)

●研究主体

障害児教育における新型コロナウイルス関連問題検討会

主催：全国障害者問題研究会鳥取支部

検討会委員長：國本真吾（鳥取短期大学教員）

副委員長：澤田淳太郎（鳥取大学附属特別支援学校教員）

委員：奥村操子（鳥取県立特別支援学校教員）、齊藤里依（発達障害保護者の会主宰）、内藤綾子（鳥取市、心理士）、三木裕和（鳥取大学教員）

共催：鳥取大学地域学部地域学科三木研究室、鳥取短期大学幼児教育保育学科國本研究室

* 文部科学省学術研究助成基金助成金（基盤研究（C）（一般））「知的障害、発達障害の教育目標・教育評価に関する研究－資質・能力論の観点から」の一環として行った。

●研究経過

・第1回

日時：2020年6月14日（日） 10時30分～12時30分

会場：鳥取大学地域学部5160教室をセンターに、Zoomによるリモート開催。

招待：塚田直也（神奈川県、大学附属特別支援学校学部主事、知的障害）、西堂直子（兵庫県、大学附属特別支援学校副校長、知的障害）、高橋翔吾（大阪府、公立小学校特別支援学級担任、知的障害）、越野和之（奈良教育大学教員）。全員リモート参加。

参加者：鳥取支部上記委員に加え、寺川志奈子（鳥取大学教員）、内地留学教員、県内特別支援学校教員、全障研会員。一部リモート参加。

司会進行：國本。

・第2回

日時：2020年7月5日（日） 14:00-16:30

会場：前回と同じ

招待：古澤直子（東京都、公立特別支援学校教員、肢体不自由）、木澤愛子（滋賀県、公立特別支援学校教員、肢体不自由）、以上2名新規。他の招待者は第1回と同じ。

参加者、司会進行：前回と同じ

・第3回

日時：2020年8月30日（日） 13:30-16:30

会場：前回と同じ

招待者、参加者：前回と同じ

II 第1回検討会

日時：2020年6月14日（日） 10時30分～12時30分

会場：鳥取大学地域学部5160教室をセンターに、Zoomによるリモート開催。

招待者：塚田直也（神奈川県、大学附属特別支援学校学部主事、知的障害）、西堂直子（兵庫県、大学附属特別支援学校副校長、知的障害）、高橋翔吾（大阪府、公立小学校特別支援学級担任、知的障害）、越野和之（奈良教育大学教員）。全員リモート参加。

参加者：鳥取支部上記委員に加え、寺川志奈子（鳥取大学教員）、内地留学教員、県内特別支援学校教員、全障研会員。一部リモート参加。

司会進行：國本。

1. 検討課題

検討会に招待した4名（塚田、西堂、高橋、越野）に、事前に検討項目（Q1～Q5）を示した。

Q1：学校の休校期間・再開について

（3月の休校対応の期間、4月以降の休校の状況、授業再開の時期 など）

Q2：休校時の学校の対応について

（休校時、児童生徒への対応〔家庭学習、ICT教材、学校での一時預かり〕、教職員の業務〔勤務、家庭訪問〕 など）

Q3：休校中の児童生徒の様子について

(子どもの心理面や行動面への影響、保護者・家庭への影響、児童デイの対応 など)

Q4：再開後の学校の様子について

(分散登校、スクールバス運行、授業、給食実施、行事、進路支援 など)

Q5：感染流行の第2波に備えた教訓や課題について

時間の都合で、Q1,2、Q3,4をまとめて聞き、Q5については話題にできなかった。

2. 招待者の発言：Q1～Q4をまとめて

*以下の発言記録は、発言者の意図を曲げないよう留意し、要約したものである。また、すべての発言を収録したわけではない。

卒業式、入学式が突然なくなった

・安倍首相による休校要請が2月27日に出て、その翌日に臨時休校が決定された。当時は6年生の担任をしていたので、翌日に卒業みたい。休校期間は3月2日から19日まで。4月1日から緊急事態宣言が出されて、4月1日から5月29日まで。春休みプラス臨時休業。6月2日に入学式を実施。これは新入生と保護者、担任、管理職のみ。縮小で。翌日6月3日から5日までが午前授業。分散登校で、学年ごとに分けて、小規模の授業を行った。6月8日(月)から給食を始めて、全学部の登校をしている。

・学年で登校場所を変えて、玄関で過密化にならないように。子(ども)たちは見通しがないと不安なので、zoomを使った授業や動画配信をし、その動画配信で登校場所が変わるということや、教材を作成して各家庭に見てもらったり、教員が届けたり、子どもたちは大きな戸惑いなく楽しそうに通ってきているのが救い。

・スクールバスは6月3日から運行を始めたが、過密化を防ぐということで、ご協力いただけるご家庭については自家用車で登校を依頼した。あとは、大学とか文科省に掛け合ったが、スクールバス増便をしますと文科省のQ&Aに書いてあるが、スクールバスは高いということで、なかなか許可が下りなかった。かなり要求したところ、タクシー券を配るとということで、予算がおりて、コロナ対策をしている地域のタクシーのタクシー券を公共交通機関での登校が必要な子に配った。

子どもが生き生きときている

・欠席なく全員(学校が楽しいみたいで)生き生きと来ているのがせめてもの救い。本当に子どもに助けられている感じがする。

2月頃から危機感が出ていた

・2月ごろから危機感が出ていた。(一部の)生徒で、落ち着くまでは休むと言い、休みだす生徒もいた。2月後半から市中感染が広がっているという情報もあった。陽性はゼロと出ていたが、医療関係の情報では市中感染が広がってきているということもあった。高等部遠足を中止にした。

・卒業式がとて大きな課題だった。3月13日に小中高一斉に簡略化した卒業式を何とかやりたいということで、3月に入ってからも準備していた。大学の卒業式が中止になったということもあって、3月5日の時点で、附属学校部長から卒業式を中止にしてほしいという要請があった。

・卒業証書を授与するというので、一人ずつ30分ごとにスケジュールを組んで、証書を授与して、一言お話をして花束を贈呈して記念撮影をするという形で、一つ区切りができた。

・入学式。JRなどの公共交通機関を使う児童生徒が半数ぐらいいるので、学校に来させるのはどうかということで、4月は入学式できなかった。ずっと2か月間休校だった。6月1日から再開、6月1日に高等部の入学式、6

月 2 日に中学部の入学式、6 月 3 日に小学部の入学式ということで、一応区切りの式をできた

小学校では

・3 月 2 日（月）の午前中まで授業をすることが決まった。3 月 2 日にクラスの子たちを集めて 6 年生を送る会を行った。通常級と行ったり来たりするもので、支援学級で 1 時間授業しますと言って集めた。6 年生を送る会は、校内の支援学級の 30 人ぐらい全員でやろうと思っていて、保護者も来て参観みたいな感じでやろうと思っていた。6 年生が 1 人ずつ思い出などをパワーポイントに作って準備していた。それをクラスでやろうということにした。1 人がクラスの授業のこと、もう 1 人は飼っている犬のことを発表すると言ってプレゼンをつくっていた。とってもほっこりしたい時間を過ごせたと思った。記念撮影などもした。あと 1 か月あったらもうちょっと何かやっていたんだろうなと思うが、一応やりたいことはやって終わった。

・4 月 7 日には入学式があって、結局次の日からなくて、2～6 年生の始業式もできなくて、そのままずっと休校になった。1 週間遅れの 15 日（水）16 日（木）17 日（金）の 3 日に分けて学年ごとに登校（出席扱いではない）し、簡単な始業式とクラスと担任を発表し、教科書・手紙などを配布した。5 月に、出席番号の前半と後半に分けて、何度か登校（出席扱いではない）する日「健康観察日」を設けた。

・多くの子どもたちが登校したが、中には 5 月末まで本人と一度も会えていないという子ども、学校で数人いた。学校に来ていない理由は、感染リスクがあるからとか、出席扱いでなければまあいいかとか、家庭が押し出す力が弱くてとかいろいろだった。6 月からは正式に学校が始まり、出席扱いになって始まっている。はじめの 1 週間は分散登校で、午前か午後 3 時間ずつやって帰る。先週は午前午後で、給食もありと。午前の子は 3 時間勉強して給食を食べて帰る。午後の子は来たら給食があって、それから 3 時間勉強して帰るというものだった。給食も簡単なもので、パンと牛乳とゼリーぐらい。

学童保育など、福祉がたいへんだった

・4、5 月に、放課後児童クラブに学校の施設を開放した。事業所へ管理職が電話。三十数か所（デイサービスが）あり、ほぼすべてが開所して子どもたちを受けとめていた。本校も 6 割以上利用していた。

・一方で、デイサービスでは遊び場が限られ、市内の遊び場が使えない。子どもを連れて歩いていると罵声を浴びせられる。「何で子どもたちを連れて歩いているんだ」。近所の監視の目もコロナにより強まっていく。子どもたちを安心して遊ばせる場所がない。せめてということで学校の校庭、遊具を、消毒のうえ、時間割を割り振って、10～15 か所の事業所に利用してもらった。

職員対立が生まれそうだった

・学校施設の開放について、職員間で強い反対意見があった。（コロナが）出たらどうするんだと。また、こういう論文があってこういう危険があるんだという言う先生もいた。先生たちの不安に対して、分断をしないように、対話の工夫が求められてきた。

・不安感から攻撃、対立が生まれる。不安を取り除くこと（が大切）。子どもと保護者を中心にして、どう学校教育の意味を問いつるか。そのための条件を整えることに尽力した。

子ども・家庭への影響

・休業になって、お父さんの勤務形態もテレワークになった。お父さんは家で仕事をしているが、子どもにとってはいつもいないお父さんがいてくれて、これまで蓄積していた発達のエネルギーが、その両親の受けとめによって花開いていくという状況もあった。

・DVD を送ったことで、保護者や子どもたちからの反応はよく、子どもたちが毎回、毎日繰り返し見ているとい

うような話があった。先生たちはすごく勇気づけられ、第2弾、第3弾を作った。ネット、ホームページに公開し、パスワードを付けてネットにあげた。先生たちも楽しく、子どもたちと連絡をとりながらやっていた。

・給食スタッフ、スクールバス添乗員、警備員、作業員、そういう人たちの仕事をどうするかというところが大変で、一応切ることなく雇用を続けて対応してきた。

小学校・中学校では「学習の遅れ」が問題になった

・小学校、中学校は授業をどう進めるか、授業数が少なくなって困る、教科書が終わるのかというそんな話を中心にしていた。通常の学級と交流している子どもには通常級と同じプリントを出すことになっていた。

・小学校の先生たちは授業を進める動画を作りたい感じで、それっていいのかなと思っていた。教育委員会もスタディサプリとか動画で勉強するようなものを配信しているところと契約する。それを見ながら、ぜひ授業を進める計画を立ててくれと言われた。

・川を船が上がったり下がったりする時間から、川の流れの速さを求めるとか、そんな動画もあった。好きな子はいいけど、勉強苦手な子はさっぱりなんじゃないかな。多くの子はあんまり活用していない。

・教員が運動場で子どもたちと遊んでいて、地域からは何で学童の子どもたちだけ運動場で元気に遊んで、そこに先生がいて、どうなっているんだと批判の声もあった。

・知的障害のある自閉症の子。本人と妹と母でずっと家にいるのは大変じゃないかと思って時々電話してみたが、意外と大丈夫そうだった。3月末には、母が風邪をひき、病院に行くのも怖かったようだが、おそろおそろ受診して、何とか復活して4月には元気に戻っていた。

・3ヶ月の休みの間、外にも1回しか出ていないという徹底で、買い物も父が仕事帰りにしてくる。本人は学校どうなっているんだろうと思うようで、時々学校の服を出してくるということを知った。100%安心できるまでは家でいたいのでと言って、これはしばらく登校しそうにないと思う。

・課題ができないで困っているという声が多かった。学校がはじまったらいっしょにやるから大丈夫だと伝えた。家庭の力が弱いところは、登校日に来ず遊んでいたり、昼夜逆転になっていたりしていた。

・大阪の場合、知事や市長が勝手にいろいろ言って、教育委員会も知らないうちにいろいろなことが決まるので、教員が何かを考えて学校のことを決めるということに関しては、非常に心がなえてしまう。何か言ってもあの人たちが言ったことが決まるんだろうという感じ。決まるのを待っておいたほうがいいんじゃないかという話は多い。

ふれあうことの大切さに目を向けて

・特に新入生、新学期始まって新しい環境を作っているところで触れ合えないことの問題が(大事)。学習面の遅ればかりが言われているが、その部分にもっと注目しないといけない。

・コミュニケーションすることの面倒くささのような、そっち(関わらない)ほうが楽というか、関わりの苦手な子たちは、そこが楽になっちゃって、ますますつながりをとれなくなっちゃうんじゃないかということに不安に思った。

・給食黙って食べるとか、触れ合えないとかというのは確かにすごく気になる

・学校に来て先生や友だちがいるから6時間いたり、生活が充実するんだろうなと思っている。

3. 報告を受けての発言：リモート参加者から、会場参加者から

福祉への丸投げはなかったか

・公立学校の場合は、学校が一旦シャットダウンして、口の悪い人に言わせると、学校は勝手に休みになって、福祉に丸投げしたと評価をするということも聞く。デイサービスなどに学校を使ってもらうのも多数派の経験じゃないと思う。一般の先生たちや公立学校の場合はどうか。

授業を進めようというドライブ

一番印象に残るのは、授業を進めないというドライブがものすごくかかるっていうこと。とりわけ、近畿圏はどこもそうだけど、支援学級と通常学級がいわゆる原学級の方に重複して日常が営まれているところがあるので、発達に遅れがあったり偏りがあったりする子たちにも、黙っていると通常学級の課題が出て、それができないことがものすごくストレスになる。「学校に来てからやるから大丈夫だよ」と先生が言ってくると、緩和されると思うけど、そういったことなしに、あるいは中学校なんかでもそういったプリントが配られて、担任が慌てて回収するけど、保護者から不安とかクレームが来るとか。

そういう学校が何にシャカリキになりやすいかということと、一方で3カ月一度も外に出ていないとか、もともと精神科の課題を抱えていた人が命を絶ってしまうという事例と、学校が見ている課題の解離みたいなのところをどう考えるか。学校現場ではどういうふうにもその辺を認識されたり自覚されたりしているのか、されにくいのかということも考えてみたい。

オンライン授業などの実態は

オンラインなども、今の子どもたちに必要なものをちょっとでも届けようというスタンスで取り組まれた場合、そのために制約あっても活用しようと思って取り組まれた場合と、何かともかくやれと言われたからやったふりしている感じの場合とでは、ずいぶん分かれた感じがする。その辺のところも、学校としての対応とか先生方の対応のあり方を共通認識図っていったのかということももう少し伺ってみたい感じだった。

長期休業は一大事だった

学校が長期にわたって休校にすることは大変なことなんだということを改めて確認する必要がある。安倍さんの、全国一斉休校要請の歴史的な審判というか、学校を閉じてしまう、それも長期にわたって見通しなく閉じてしまうということへの甚大な影響を考える必要があると思った。

勉強を進めろ、学習進めろというドライブがとても強とおっしゃっていて、それは感じる。だから、特別支援学校はどうぞ自由にと議論になりがちと思っている。教育っていうのが本来何を求められるのか、健常児で進学を目指す子どもたちも、障害がある子どもたちも、共通に学校が担う役割が何かということをしっかり考えていく必要があるだろうと思う。

公立校の問題はその通りだ。今回、肢体不自由校なども対象としていないので、今後、話題を拡げていく必要がある。プライバシーの問題もあるが、感染が身近にあった子どもたちとか、家庭内で感染があったとか、地域内とか学校でとかというあたりは、学校にどんな困難をもたらしていたのかということも考えていく必要があるのかなと思った。

コミュニケーションをするな、という問題

先生たちが個人化され、分断されているという話があった。子どもたちにとって今一番問題なのは、学習の問題もそうだが、コミュニケーションをするな（しゃべるな、近づくな）と言われていていること。本当ならば、先生とタッチしたり手をつないだりとか、子どもたち同士もそうなんだが、触れ合いながらつながっていくことこそが、一

番大事なときなのに、また学校はそれを支える場なのに、そこが切り離されていることの、子どもたちへの影響がどうなのかなということをととも思う。先生たち大人も分断されているけれど、子どもたち同士とか、子どもと先生とか、一番つながっていく時期に、それとは逆の向きに行動しないといけない、給食も黙って食べなくてはいけない、その影響がすごく大きくて、どうなのかなと。特に新入生、新学期が始まって新しい環境を作っていくところでの触れ合えないことの問題、学習面の遅ればかりが言われているが、そのところの問題にもっと注目しないといけないと思う。

その中で、先生方が DVD を作られたりだとか、あるいは預かり保育に先生が参加されておられたりとか、家庭訪問されたりとか、つながりを作っていく取り組みをされているっていうことに対して、感銘を受けた。

・家庭でコミュニケーションが切り離された中で、どんな生活をしているのかなと思う。でも、それになれてしまうと、コミュニケーションすることの緊張や面倒くささから、そっちの（関わらない）ほうが楽というか、関わりの苦手な子どもたちは、そこが楽になっちゃって、ますますつながりをとれなくなっちゃうんじゃないかということに不安に思った。

4. 事後、鳥取支部での議論

<自由討論>

- ・休校中にオンラインや DVD を使った学習が提供された
- ・登校が再開された後も、スクールバスの運行について、加設備の要求があった。一方、密を防ぐために協力してもらえ家庭には自家用車登校を促した。タクシー券を使い、公共交通機関の利用を避けた。
- ・卒業式、入学式を何らかの形で実施する努力があった。
- ・感染リスクを考えて、登校日を設けないところも。
- ・放課後デイでも 4 月以降閉所するところもあった。（福祉への負担が過重であった。）
- ・放課後デイ、家庭に学校開放を呼びかけたところもあった。
- ・児童生徒には、オンラインや DVD の活用が試みられた。絵本の読み聞かせなど、子どもたちが見て楽しめる内容だった。校内合意が得られない学校もあった。
- ・休校中は一斉メールや電話連絡。必要に応じて家庭訪問を行い、児童生徒、家庭の実態を把握しようとした学校もあった。
- ・教職員集団の対立、意見の不一致が見られた。電話連絡の回線仕様について、調整が必要だった。
- ・テレワークで家庭に両親がいることで、「発達のつぼみが花開く」子どもの姿もあった。一方で、家庭生活がひっ迫する家庭もあった。

<今後の課題>

① 学校教育の意義を確認する必要がある。

- ・（狭い意味での）学力へのドライブが強い。「学習の遅れを取り戻す」。
- ・オンラインや DVD の学習においては、内容に差が見られる。小学校は教科書を進める内容。一方で、特別支援学校では、普通の幼児児童生徒との関りを重視した内容（絵本の読み聞かせ、先生紹介など）。
- ・学校再開後も、ソーシャルディスタンスや三密を避けることが重視されている。
- ・学校とは何か、という問いかけがある。

② 長期の休校が与えた影響の大きさを訴える必要がある。

- ・休校を受けて、学校現場は大きく混乱した。その中で、卒業式、入学式は重視した。
 - ・家庭での苦勞が見られた。一面ではいい部分もあった。
 - ・休校は、学校ごと、地域ごとの対応の方がよかったのではないかと。3月の全国一斉休校、大阪の知事の進め方など、問題があった。教育行政の自主性を認めさせる必要がある。一声で全国一斉にその通りにするのは、戦争に突っ込む感じがした。首相の「やったぞアピール」にも見える。危機感をあおっている。危機感をあおられて、現場教員はまとまりにくくなっていた。
 - ・全国一斉休校に対する、学校、教育委員会の主体性、自主性が問われている。
- ③ 感染者へのバッシング問題の検討が必要。
- ・今回は深く話せなかったが、バッシングの問題がある。
 - ・ハンセン病の時の教訓を生かさないといけない。新型コロナへの科学的な理解が必要。

Ⅲ 第2回検討会

日時：2020年7月5日（日） 14:00-16:30

会場：鳥取大学地域学部 5160 教室をセンターに、Zoom によるリモート開催。

招待：古澤直子（東京都、公立特別支援学校教員、肢体不自由）、木澤愛子（滋賀県、公立特別支援学校教員、肢体不自由）、以上2名新規。他の招待：第1回と同じ。塚田直也（神奈川県、大学附属特別支援学校学部主事、知的障害）、西堂直子（兵庫県、大学附属特別支援学校副校長、知的障害）、高橋翔吾（大阪府、公立小学校特別支援学級担任、知的障害）、越野和之（奈良教育大学教員）。全員リモート参加。

参加者：鳥取支部委員に加え、寺川志奈子（鳥取大学教員）、内地留学教員、県内特別支援学校教員、全障研会員。一部リモート参加。

司会進行：國本。

1. 招待者の発言

肢体不自由児を「学校で預かる」といいながら

- ・（肢体不自由児なので、）急に放課後デイで1日預かるという体制がとれるところが少ないので、当初はみなさん学校に来るといふ形。その代わり、スクールバス（以下SB）の運行はする。給食は出さない。弁当持参だった。あくまでも、学校は臨時休業ですよということと、保護者の就労とか特別な事情というのが条件だった。保護者は知的障害の学校に比べたら肢体不自由の方は保護者両親が就労している数がちょっと少ないのか、そういうこともあって、実際には2割程度の利用だった。
- ・教員としては、まだ2月末はむしろインフルエンザの方が怖い時期だった。肢体不自由校の先生はいつも感染にはすごく気を配っていて、子どもたちに風邪を持ち込んじやいけないとか、自分の体調管理と衛生には取り組んでいる。専門性って信頼がないんだなと思った。
- ・春休みまで休校と東京都は早速決めたので、卒業式どうするんだろう、そんなに長く休むのかと感じた。様子見て、卒業式や終業式ぐらいはできればいいのに、というのが正直な気持ちだった。
- ・放課後デイが密であることと、子どもたちを感染させずに適切な環境であるのかという話をかなり言って、この

4月から「放課後デイは優先にしない」「学校でも預かりをしましょう」ということで、都から方針が出たので、もちろんSBは運行されるし、昼食（給食と言わずに昼食と言うように言われるのだが）提供も行われ、預かりをしていく方針になった。

・学校の管理職からは、担任が言うと親に押し切れちゃうから、電話は管理職や主幹教諭がしていた。連絡では、教員も在宅勤務をとるので、体制がとれないと。利用希望の場合はどんな事情があるのかとか、かなり詳しく聞いて、利用を控えるようお願いしていた。放課後デイも閉所のところが多かったのだが、学校に来る子は1割ぐらいに減った。

・休校中なのであくまでも昼食と言うことだった。給食費をとっている。子どもたちへは給食と言っていたが保護者への説明は昼食提供という言葉を使うように言われていた。

病院に駆け込めない不安

・近くの主治医になっている大学病院や、ICUのある病院がことごとく満床で、外来を受け付けられない状態。コロナに感染するより、今具合が悪くなったら運んでもらえる病院がない。保護者は怖がっていた。肢体不自由特別支援学校の子たちは、具合が悪くなるとICUやNICUに入る子が多いので、具合を悪くさせられないと保護者は口々に言っていた。

・主治医の先生に電話で「本当に具合が悪くなったら連れていっていいか」と交渉した保護者もいた。それに対して、そういう時は受け入れると。ただし、面会も付き添いも一切認めない中で、その子だけ預かると言われた。小学部は、小さい子たちも多いので、そういう中で入院をさせないのであれば、具合悪くさせられないと言っていた。

・休校期間・再開に向けての動きについては、（他と）大きな相違はない。滋賀は流行がそんなにしていない時点からの休校になる。2月27日の首相の会見を受ける形で、次の日の朝礼で一方向的に連絡で伝えられた。校内ではあわてて荷物をまとめて持って帰らせるクラスもあった。私のクラスは6年生がいなかったの、学校に置いておいて困らないものは、必要以上のものを持ち返らせないように対応した。

・3月11日から一時預かりを開始している。しかし、条件は厳しくて、保護者送迎が絶対、SBは出さない、昼食は各自で弁当持参、というものだったので利用者はとても少なかった。

福祉事業所が支えてくれた

・重心の子どもたちは、医療的ケアの子を受けてくれている事業所がすぐに対応し、丸1日受けてもらっている。医療的ケアが必要で、ひとり親家庭で、どうしても働かなくてはならないという家庭が何軒もあった。事業所の所長が元訪問看護ステーションの所長だったので、地域の家庭の全部を知って支えてくれていた。

・4月7日の緊急事態宣言が出た時点で、市内（の感染者）がまだ24人。4月8日入学式、9日、10日は登校、13日からまた休校。入学式はできたが、入学生、保護者、管理職だけの参加。在校生は教室対応。教員も二手に分かれ、見守りの1日だった。学校に来て意味があったのか疑問。

・SBが出ることになった。過密を避けるために保護者送迎をお願いするものの、弁当持参でありながらも、利用者はかなり増えた。小学部は全児童が78人で、そのうち二十数名が毎日通ってきている状況。家庭での過ごし方が、3月の状況がやはり厳しかったということが伺えた。

学校を開けていた方がよかったのではないか

・重症児クラスのもの、コロナだけではなくインフルエンザや普通の風邪でさえも、感染にすぐ気を遣って生活している。自分の健康管理だとか、菌を持ち込まない、持ち出さないための手洗いとか着替えとかを、個人差はあるが徹底していた。今まで気を付けていたことをきっちりしていれば、学校でもよかったのではないか。医療的

ケアを受けてくれる事業所の方にも応援に行っているが、環境としては部屋の大きさも過密具合も、気を付けていることというのと同じような状況なので、学校を開けていた方がよかったのではないかと。

授業、教材の取り組み

・新学教科書の郵送が行われた。自立活動教育課程は音楽 CD も作ろうということで、校歌とか朝の会の歌とか、日ごろ歌っている音楽の CD を作って郵送する。知的代替と準ずる教育課程は学習プリント（線つなぎ、シール貼り、塗り絵など）を郵送した。その他に Youtube の動画配信をするということで、教員の紹介、各学年ごとの教員紹介や読み聞かせ、手遊びパネルシアター（図書館司書の先生も協力して作ってくれた）などを作った。

・各家庭のインターネット環境を調べるアンケートを返信封筒を入れて全部郵送で送った。そうすると、だいたい 9 割がた環境があるという返答だったが、それが携帯だったり、環境はあるが回線がいくつもあるわけではなかったりという状況だった。保護者が在宅勤務で回線を使っていれば、iPad を仕事で使うとか、兄妹もいたりする。インターネット環境があれば OK のような感じで進んでいるのがすごい違和感があった。オンライン授業に参加できない家庭には DVD を送るという形で対応していた。

・楽しい DVD を作って送ってあげた方が、子どもたちは好きなように見える。保護者もオンライン授業というと肢体不自由の子は親が全部準備しない限り、（インターネットに）つなげてイスに座らせてとか、座位保持に座らせてとか、全部準備しないとイケない。相当負担なんじゃないかというということで、これについては教員からいろいろ意見を言った。しかし、校長のトップダウンでやった。私たちが混乱したのを覚えている。

オンラインの手応えと限界

・子どもたちのオンラインへの反応は思ったよりもすごく、小さい画面でも「おーい」と呼びかけると微妙に顔が動いたりとか視線が画面を見ている。4 月に送った CD を聞いてくれていたんだという感じだった。校歌を流すとニコツとしたり、校歌を流しながらペープサートをすると動きを止めて見ていたりとかということで、そういうことにちゃんと注目したりとか、動作で答えようとしていたりとか、オンラインでも何となく授業っぽい感じで、子どもの反応も出てくるんだというのは驚きだった。保護者も「思った以上に見てました。」とか「先生、なんかすごく喜んでいました。」と言ってくれた。

・その一方で、限界を感じていた。（画面越しだと）視線が合わない。カメラと画面が違う場所にあたりするので、視線あわせようと思ってカメラを見ていると、子どもたちの顔が見れないなど。読み聞かせも、機械音になってしまうので、声のトーンとかなんとなく声の方向、こっちから先生が来たぞという感じなどの空間を使った読み聞かせの楽しさとか、いろいろな先生が登場人物としていろいろな方向から登場して声をかけるようなやり取りが難しかった。

・学校再開になって、子どもたちの目の前で見せると、やはり「うわ〜」という顔をする。画面を通して動く教材を見せても、子どもたちにはなかなか伝わりにくい。目の前で動くとき風が来たり、何かの音が聞こえたりするから子どもたちは見るんだなと感じた。保護者は丁寧に「先生、今名前呼んだ時に手が動きました。」と言われるが、画面だと顔しか映っていないので、なかなかそれが分からなくて、やはり傍にいと名前呼ばれた時に力が入ったとか、何となく小さな反応の読み取りが、画面を通してだと限界があるなと感じて、難しさを感じた。これ（画面）でも見てくれるんだ、反応してくれるんだという感動がありつつも、何回も繰り返しやっていると限界を感じるというのが正直なところだった。

体、健康状態への影響が大きい

・体の影響とかはすごく感じた。学校が子どもの健康を支えているのだとつくづく感じた。尿路系感染を何回か繰り返して、登校が再開すると、導尿が必要になった子。学校だと定時（1 時間）でおむつ変えて、圧迫排尿してと

かやっていた。呼吸状態がよくなって、ショートステイに（パルスがあがらずに）入れなかった子がいた。昼夜逆転になって、入眠剤を使い始めたとか、そういう話も聞いているので、やっぱり学校って子どもたちの健康を支えているんだと思った。

- ・毎日学校に来るために車いすに乗って座位をとって、学校に来て、授業のたびにいろんな姿勢をとったり、車いすを降りたり座ったりして、こまめに水分をとったり、食事をとったりして、いろいろな人に抱っこしてもらったり触ってもらったりする中で、体をほぐして気持ちもほぐしてということで、リズムもでき、体が整うんだというのは、改めて感じていた。学校に通わないと、家庭だけの力では健康を守るのは（保護者はもちろん一生懸命やっているが）大変だと感じた。

- ・医療的ケアはないけれど、運動障害が重くて普通の福祉サービスは利用できないし、医療的ケアの事業所の範囲でもないと言って断られている、本当に行き場のない狭間の子どもたちが心配だった。その辺の子どもたちはできるだけ学校に来てもらえるように連絡した。大きな声が出てしまったりとか、ちょっと自由にさせておくと寝返りであちこちぶつかってしまったりとか、ほふく前進のように移動して、家中のものがバラバラになってしまったりとか、家庭でみるにはすごく保護者の負担が大きい。四六時中ケアが必要な子とはまた違った大変さを抱えておられるので、できるだけ学校で受け入れるようにした。

事業所への応援に教員も参加

- ・医療的ケア児を受け入れている事業所に担任を中心に交替で応援要請を受けて行くのだが、学校の職員という外部の者がウイルスを運んではいけないとなって、かなり気を遣って、手洗い、着替えや、食事介助をはさむ場合はエプロンを持参するなど（事業所でも貸してもらえる分はあるが）、できるだけ清潔なものを用意できるものはこちらから持っていくようにして行った。休日の外出は極力控え、公共交通機関もできるだけ利用しないようにし、かなり神経質になった部分はあった。

- ・全部家庭で過ごしている子どもが気になった。学校のことを忘れないようにというか、お楽しみ DVD を作成して配布した。よくある朝の会の流れや、前年度の学習で子どもたちが好きだった手遊びやダンスや歌などを収録したものを作成した。

- ・私たちがこういうこと（DVD）をしたことで、うちもしてみようかなという声が上がったのと、それは保護者からの要望があったのか、絶対しなくてははいけないのか、1 クラスがしたら他のクラスも欲しいって言われるじゃないかと怒られたこともあった。

- ・そこまでの日々の先生と積み上げてきた歌だったり朝の会だったり、学習を積み上げてきて、その子のことをよくわかって先生が作られたものは、コミュニケーションが織り込まれた大事な DVD として届けられているところに素敵な意味があるなということも思った。単に学習課題をこなすだけではないという、日々向かい合って対面でされていた授業の意味っていうのは、逆にそこに本当に大事な意味があったということも、改めてオンラインの難しさで確認させられた。

授業再開時の混乱

- ・6月。急に1日おきに勉強の日があるという状態。1年生。他の友だちと車いすに座って、「今日は〇〇の勉強しますよ。」とスケジュールが組まれた状況に混乱。暴れて泣いて授業にならなくて。他の先生からも「授業にならないから何とかして。」と言われて。分散登校は大人の都合だったのかも。

- ・授業については制約がある。教員はマスク着用で、通勤と校内のマスクを変える。1日2枚必要。歌、調理学習、子ども同士の接触はダメ。教室は子ども同士のソーシャルディスタンスを作るために、養生テープで子どもの人数のエリアを分けている。なので、車いすの間隔が1mから1.5mぐらい開くように四角いマスを作った。消

毒剤もたくさん配られて、手すりやマットなどの消毒剤と、手用のアルコールも違うものがバンバン配られているような状況。すごい制約の中で授業をしないといけなくて、これが日常になってしまうか。

・管理職には、「これからは自己防衛の時代です。」と言われた。なので、自分の行動で、例えば電車の何両目に乗って通勤しているのか、土日にどこに行ったとか、誰と会ったとか、そういうことは感染したら全部聞かれるので、それを全部記しなさい。教員間では「自己防衛」は聞こえはいいけど、「自己責任」だよね。感染予防だから、いろいろなものが薄く流されていってしまう。

バス増車、給食再開はあったけど

・県から各学校にSB1台増車された。来たのは普通の観光バスが1台で、8月まで限定。高等部の比較的落ち着いた乗車が可能な人（選抜メンバー）が選ばれて、そのバスに乗れるようにして、他のバスに空間を持たせる。バスは増えたが、短い期間のために、コース変更や乗車生徒の選抜とか、教員は余分な仕事が増えてしまった。学校再開で、私たちは授業の準備とかがしたいのに、そういうところにも手を取られなくてはいけなかったということが、教師間の中から不満が出てきた。

・給食もやっと再開したが、調理工程を減らす、配膳数を減らす。今までよりも1品減らされることになった。どんぶり汁物だけとか、ラーメンと野菜炒めとか、ちょっと残念だった。昼食時間というのは、楽しみにしている子どももいるのに、楽しみが一つ減るような感じだった。

・エアコンをつけても、窓を開けて換気をしなさいと言われる。体温調節の苦手な子どもについては、アイス飲んで冷やすとか、体温が下がりやすい子については毛布を掛けるとか、冷やす子や温める子や、一人ひとりに合わせて私たちはいつも以上に気を配る必要のある毎日である。

・行事もぜんぶ中止。学部集会ですら中止。1学期に予定していた運動会もないし、校外学習、宿泊学習もないし、クッキングもやめてください。プールもできません。中止の嵐で、何も面白いことがない。その中でどんなことができるのかということを考えるのが、私たちの今の課題かなと思う。

知的障害の子どもは体重増加もあった

・知的クラスでは、休校期間中に3～7kg体重が増加した子が続出して、久しぶりに会ったら別人のようになっている。でも、責められない。保護者は家で1日面倒見なくてはいけなくて、ちょっとでも静かに問題なく過ごしてもらおうと思ったら、好きなものを好きなだけ食べさせるというのはありがち。学校に来て給食を食べるから、みんなと一緒に野菜も食べられたりとか、いろいろもめごとはあるけど、先生がもう一口食べたと言われてからもう一口食べてから帰ろうということがあるのに、そういうことが無いというのは、いろいろな意味で健康状態にかかわってくるんだなと思い、学校給食の役割もこの機会にしっかり見直してほしいなと思った。

・休校期間中に5月から高等部の進路実習は、相手先の状況を見て実施している。こんなにいろいろ中止になっ

学校は安心安全に過ごせる場所なのに

・重度重複クラスで今まで気を付けてきたことは、結構ベースにしたら、学校は安心安全に過ごせる場所なので、その上で条件を整える。今は過密な教室を使っているが、もっと広い教室があったらなあとか、教室が足りなくて、特別教室を教室に変えたりしているが、教室数がもっとたくさんあったら、もっと少ない人数での教室が持っていて、十分人が付いたら安全に過ごせるんじゃないかとか、そういう条件面を整えたら、すぐ学校っていいところなのではないかというようなことを感じる。

2. 事後、鳥取支部での議論

医療の危機

・医療の危機があった。命の選別につながりそうな状況だ。重症心身障害児も在籍する肢体不自由学校は、元来、感染症対策はしっかり行われている。にもかかわらず、急な休校になり、学校現場への不信感があるのではないか。

学力問題

・狭い意味での学力問題が表れている。学習を進めろというが、その内容は教科書の中身を遅れることなく進めること。一方で、これまで大切にされてきたコミュニケーションや関わりの部分が考えられていない。

- ・スクールバスなどの移動手段の保障が確保されにくい。
- ・頑張っている学校もあれば、手が打てない学校もあったのかもしれない。

<まとめの議論>

① 学校教育の意義を確認する必要がある。

- ・(狭い意味での) 学力へのドライブが強い。
- ・オンラインや DVD の学習においては、内容によって差が見られる。小学校は教科書を進める内容。一方で、特別支援学校では、普段の関りを重視した内容(絵本の読み聞かせ、先生紹介など)。
- ・学校再開後も、ソーシャルディスタンスや三密を避けることが重視されている。
- ・子どもたちの健康を守る役割。現場が信頼されていない。そもそも、学校は子どもたちにとっての「安全・安心」の場ではなかったのか?
- ・保育現場は休園にならなかったが、小学校に向けてというドライブが強くなっている。
- ・コミュニケーション(人間発達の重要な要素としての)の視点、実際に触れたり関わったりするという点が、オンラインなどが盛り上がる中で無視されているのではないか?

② 長期の休校が与えた影響の大きさを訴える必要性がある。

- ・休校を受けての学校現場の混乱。卒業式や入学式の重要性。家庭での苦勞。
- ・一面ではいい部分もあった。
- ・地域ごとの対応の方がよかったのではないか。教育行政の自主性を認めさせる必要がある。一声で全国一斉にその通りにするのは、戦争に突っ込む感じがした。やったぞアピールにも見える。危機感をあおって。
- ・行事はこぞって中止なのに、現場実習などの進路関係だけ実施する。
- ・家庭任せの部分が大きくなる。協力できる家庭もあれば、できない家庭もある。

③ 感染者へのバッシング問題の検討が必要。

- ・ハンセン病の時の教訓を生かさないといけない。新型コロナへの科学的な理解が必要。
- ・病院が手いっぱいになり、医療崩壊した時に障害者の危機の一手前だったことも考えられる。東日本大震災などの災害現場でもそうだったように。
- ・障害者の就労も、「健常者も大変なのに」という話になってくる。
- ・バッシングの問題は、障害者運動には重要。ハンセン病や精神病に対する非科学的な偏見や差別。我々がしっかり関わらないといけない。新型コロナウイルスを科学的にとらえないといけない。未知な病気ということが加わって、より怖かった。

IV 第3回検討会

日時：2020年8月30日（日） 13：30-16:30

会場：鳥取大学地域学部 5160 教室をセンターに、Zoom によるリモート開催。（第1回、第2回と同じ）

招待（第2回と同じ）：古澤直子（東京都、公立特別支援学校教員、肢体不自由）、木澤愛子（滋賀県、公立特別支援学校教員、肢体不自由）、塚田直也（神奈川県、大学附属特別支援学校学部主事、知的障害）、西堂直子（兵庫県、大学附属特別支援学校副校長、知的障害）、高橋翔吾（大阪府、公立小学校特別支援学級担任、知的障害）、越野和之（奈良教育大学教員）。全員リモート参加。

参加者：鳥取支部委員に加え、寺川志奈子（鳥取大学教員）、内地留学教員、県内特別支援学校教員、全障研会員。一部リモート参加。

司会進行：國本。

1. 司会からの発言（資料3-1参照）

①「**全体的な影響**」。休校によって、特に放課後デイサービス（以下、放デイ）など、福祉への影響が問題だった。先生方が努力された地域もあるが、学校が十分対応しきれてなかった地域もあるのではないかな。

障害種別によっても、負担に違いがあった。休校の間、受け止める家族が、かなりの負担を強いられてきた。親だけではなく、祖父母などまで広がっている地域もある。シングルマザー・ファザーで、命の問題まで含まれたケースもあった。

感染拡大地域では医療がかなり圧迫されていた。要医療児、高齢家族が安心して病院に通えなかったり、通常の診療を避ける状況があった。鳥取も、1人の感染者が出ると医療体制は20~30人ぐらいの構えになっている。

「教職員」。孤独感や孤立感など、分断化された職員集団。職員室の写真（職員室の個々の席が段ボールなどで仕切られているもの）。職員室などで会議ができなくて、職員会議は校内オンライン。

②「**学びを止めるな**」ということ。

1つめは狭い意味での学力保障の動き。全国的には6月になるまで休校。その間進められてきたのは、これは通常教育が熱心だったが、ICTツールの活用。ギガスクール構想もあり、ここぞとばかりにICTを使ったオンラインの授業、学習素材が整備された。

障害のある子どもをめぐるのは、意見が分かれるところ。一つは体制整備に地域間の違いがあった。中身に関しても、オンラインでのツールをビデオなどで学習素材を整備させる動きもあれば、子どもたちとの関わり方、子どもが見るような歌だったりお話だったり、先生がクイズを出したりといった素材もあった。「学びを止めるな」ということと「学校のあり方」とを含めて、中心的な議論になる。

通常教育では「学びを止めるな」、遅らせてはいけないという中、障害のある子どもでは全体的に置いてきぼりになっているんじゃないか。障害児の「学習保障」の議論が忘れ去れている。休校中でも、進路の動きは止めてない。

子どもたちが学校に集えない。学校に集ったとしても、「ディスタンス」で、子どもたちや教師が触れ合ったり近づいたり話したりできない。コミュニケーションが大きく変化する。

学校教育本来のあり方はどのようなものなのか、学校とはどういう存在だったのか、ということが問われている。

く状況になる。

ICT 教育推進で、学校教育は必要ないじゃないかという極論まででてきている。

義務制以前の不就学の頃の話に立ち返ってみる。今、登校できなかつたり家の中に閉じこもっている状態は、命の問題につながっていくのではないか。閉ざされた家庭で、保護者が亡くなられたというケースがあった。本人にとってずっと家の中にいる、変化のない生活。発達の退行の問題、命の問題である。

2. 招待者の発言(1) 指定討論

全国一斉学校休校要請は誰が、どういう根拠で決めたのか

・先日、(安倍) 首相が突然の辞意を表明した。2月 27 日の全国一斉の休校要請。その結果、多くはない自治体では、独自の取り組みをした。登校を保障するとか、特別支援学校は 3 月中は登校することにした埼玉県とか、子どもらしい生活を守るために独自の判断をした自治体もあった。しかし、圧倒的多数の地域は首相の要請によって休校を余儀なくされた。萩生田文部科学大臣も、3 週間以上にわたる休校要請は長期間で驚いているという対応だった。

・つまり、教育行政を司る省庁の責任者である文部科学大臣にも十分説明をせずに、まさに安倍首相と誰が関わったかは分からないが、科学的根拠のない要請をして、そのことが全国の子どもたちや保護者や、あるいは学校の先生方や、さらには放課後デイサービスなどの、障害分野だけでも本当に多くの人たちに深刻な影響を与えた。この責任は、辞めたからと言って曖昧にしていいものではない。森友・加計・さくらと、疑惑が解明されていないが、全国一斉学校休校要請は誰が決めて、どういう根拠で決めて、その効果はどうだったのか、功罪はどうだったのかということは、首相退陣で曖昧にしちゃいけない。そうしたことも含めて、検証の努力はとっても大事なものを。

「学校に見捨てられたような気がした」

・鳥取支部のまとめの中からキーワードをひろう。放デイと学校の関係。全障研常任委員会の 5 月の声明は、この問題にかかわって「学校と福祉の関係に大きなゆがみをもたらした」という評価をした。一方では、学校は何もしてくれなかったとか(全障研の基調報告にもそういう言葉で書いたと思うが)、学校に見捨てられたような気がしたというコメントを保護者から聞くような経験をした。一方で、ここにおられる先生方はそれぞれの学校や地域の状況によって、放デイなどの福祉の領域で子どもたちをケアしてもらっていることをしっかりわかって、学校の教師としては何ができるかということは、それぞれの努力があった。個人の努力だけではなく、学校の同僚に対する発信もあったように思う。一方ではそういうこともできずに、「思考停止」という言葉があったが(その表現は厳し過ぎると思うが)、事実としては何もできなかったという地域もある。

・分かれ目は、子どもたちの発達を、学校にいる時間だけではなく、24 時間の生活やこれまでの育ってきた歴史などの観点から見る、障害・発達・生活という部分。学校で子どもを預かれないという時に、どこで生活して、どんな生活しているんだろうと、生活の場になっている福祉の職員さんはどんな状況に働いているんだろうということに思い。しかし、それが学校教職員、先生方、管理職を含めての共通教養になっていない。そんなこと思いつきもしないというような先生たちも一方にいる。あるいは、思いついてもどう動いていいか分からないと言うべきか。その分かれ目については、改めて考えてみるべき論点があるのかなと思った。

3. 招待者の発言(2) 自由討論

重症児教育では

・重症児教育の先生たちは、日ごろから感染予防など、配慮や努力や日常学校外での生活を含めていろいろな留意をしてきている。そのことからすると、今回の降ってわいたような対応は、必ずしも実態に合っていないかった。感染の可能性が高かったり、感染をすると非常に深刻な状態になりやすい子どもたちに、でも、毎日の子どもらしい生活をどう用意するかということで、様々に作ってきた努力の到達点に学ばないような対応。

・トップダウンの「感染予防」についても、学校を誰が作っていくのかという観点を踏まえてどうとらえるのか。リスクを避けながら、でもそのリスクがあるからということで教育活動を過剰に制約しないために、障害児教育、とりわけ重症児教育や病弱の子どもたちへの教育の分野で積み上げられてきた努力が生かされていない。そういうふうな状況乗り越えていくために、学校づくり、学校の教職員の合意形成とか、方針を作っていくためのやり方を、どんなふうにブラッシュアップしていく必要があるのかということも論点。

作業所の分野では

・今回のコロナの状況は、誰も経験したことがないような事態だから、出来合いの答えはない。そういう時こそ、お互いの思考や努力を尊重してしっかり話し合っ方針を作っていくことが一番大事なのではないか。こういう時に知恵を寄せる仕方というのはどうなのだろうかと、もっともっと議論されていいのではないか。全障研の常任委員会で M さんは、作業所の分野では結局みんなが密になって論議をしながら、どういうふうに仲間を守り、職員を守り、法人や事業体を守るかということで、結局そういうふうに来てきたと発言していた。そのことと、学校現場の対応の違いをどう捉えるかということでもあるかなと思う。

「学びをとめるな」は、政策判断の誤りを「なかったことにしよう」としている

・「学びを止めるな」。直感的に言うと、行政主導でやられている「学びをとめるな」は、ある意味でいうと、冒頭に言った政府の誤り（と言っていいと思うが）、行き過ぎた判断によって生じた子どもたちの生活の破壊や制約を、大慌てでなかったことにしようとしている感じがしてならない。

・止めるなとか取り戻そうと言っても、失われたものはそう簡単に戻らない。2～3か月にわたって学校教育を奪われ、あるいは友だちとのコミュニケーションを奪われ、さらにはマスコミから流されるコロナの不安の只中に置かれてきた子どもたちの、受けた負の影響に対して、本当の意味で取り戻すというか、やり直すというか、受けた傷に対するケアを含めてやっていくためには、独自の努力が必要。そういうこと一切無しに、行事を削り、休み時間を削り、夏休みを削りして、時間数だけ帳尻合わせようとするのは、政府の犯した誤りを、みんなで大急ぎで無かったことにしようとしていることになりはしないか。

・誰もしたことのない経験を、発達期の子どもに数カ月わたって強いられた子どもたち。何が必要なのかという観点で考えないと、本当の意味で取り戻すことにならないんじゃないか。二重三重に子どもたちを追いこんだり、子どもたちの受けた傷までなかったことにして、誰も目を当てず手を当てないということに手を貸すことになるのではないかと、直感的には懸念している。

「主体的・対話的で深い学び」と、進行する現実

・今年から「主体的・対話的で深い学び」のはずだが、今やられている授業はいったいそれになっているのかどうか。ソーシャルディスタンスとか、時間短縮して7時間にするとか、大急ぎで詰め込む。どれだけ彼らの言っていた主体的や対話的というものが、表層のキャッチフレーズにすぎなかったのかということも端無くも暴露している。

・学びとか、学力（ただ、私は「学力」という言葉を広げてとらえるのは慎重な立場）については、学校や教員は子どもたちが学校に来るのをうんと楽しみに待っているんだよとか、子どもたちが何かを発信してくれるのをうんと大きな喜びで受け止めたい存在でありたいと思っているんだということ、まず学校という場に出会った子どもたちにしっかりと伝えていくこと。子どもたちが教師や学校や、さらに学校の友だちと関係を作っていく基盤を、ある意味で意識的に作るという努力なのではないか。学力形成とか各教科の授業などの基盤にやはり必要なんだということだと思う。

・今のいわゆる学力保障とか「学びを止めるな」は、教科書や学習指導要領に載っている各教科の学力をつけるということだけ。養護学校義務制以降、それ以前も含めて、障害が重い子どもたちに、きちんと学校教育を保障し、人間らしい発達を実現していこうじゃないかという努力の中で積み上げてきた、発達観とか、学校でこそつるべき力とか、学校で子どもたちに保障したい生活の中身、生活の質が何だったかということ、今の「学びを止めるな」とかかわって、改めて強く意識しないとイケない。そこのところを明確にして、できる限り言語化をし、あるいは実践記録の形で検証化して多くの人たちと共有していくっていうことは、今の形式的な狭義の学力保障をどう見るかということとかかわっても、とても大事なことになっているのではないかな。

消毒作業に追われて

・消毒にすぐく時間がかかる。寄宿舎もあるので全部やると2時間ぐらいかかる。1個1個おもちゃも消毒する。授業の準備が追いつかない。9時、10時まで当たり前になってしまう

・「子どもを長く預かれればいい教育ができるのか？」という意見も出てきている。今一番できること、やるべきことは何なのか。教職員が健康で充実して働きたいとイケない。

・子育てをしていく力を、我々はしっかり援助してきたのだろうか。家族が地域で生きていくための援助。相談・支援のあり方とか、学校のあり方ということ、我々はもう一度考える必要がないか。

行事が減ったが、2学期は実施する

・感染者の人数が増えている。8月8日まで1学期をして、2週間と土日を入れて、16~17日間夏休みがあり、8月24日から学校が始まった。夏休みがお盆の1週間しかなかった自治体もある。とにかく1学期は行事がなかった。遠足もなく、プールもなく、参観日もなく、クラスのお楽しみ会みたいなことも極力やらないでくださいと言われていた。最後の最後まで国算理科社会みたいな授業が入ってきた。

・狭義の学力、テストの点数とか（話題になる）。2学期は運動会や遠足などはする予定。遠足も電車に乗っていく予定。小学生がいっぱい電車に乗ってきたら、多分、大ひんしゅくと文句。ちょっと怖いと思いながら、10月の終わりに連れていく。

感染の広がり

・知り合いの学校で教員が感染した。大変だったと聞いている。

・東京も感染者が400人ぐらい出たから、その後200人とか、何日続きましたとか。数に対してはマヒしている。教員間でも、いい面でも悪い面でも数に左右されなくなった。

知的の学校ではオンラインをやっていない

・知的の学校ではオンライン授業をやっていない。機器を整備されたのは肢体不自由の学校だけだった。知的の学校ではオンライン設備がなく、放課後デイに行ったらいいという雰囲気になっている。教科書を郵送したとかいう話もない。

・肢体不自由校は「準ずる教育」の教育課程があり、学習空白を作ってはイケないという恩恵があったのかもしれない。東京都は知的特別支援学校は密な状態で乗車していた。換気が徹底されているから大丈夫という一言で増

車無し。横並び 4 席に子どもたち 4 人が乗って走っていた。特別支援学校が蚊帳の外みたい。結局は準ずる教育課程だけだったのだと感じている。

家庭の困難が限界に

- ・小学部 80 名いる中で、虐待ケースが 1 件あった。子どもだけ措置入院。
- ・虐待ほどではなくても、子どもが夜寝ないとか癩癩を起す。父親が受け止めきれず大声を上げる・怒鳴ることで抑圧する。母親がそれに疲れてしまい、最終的に措置入院するというケースが 1 件あった。中学部でも、ネグレクトがあった。子どもを家に置いたまま、母親は仕事に出ており、食事もない。
- ・ショートステイや入院を止めますという病院や施設が多かった。やってくれるところもあり、夏休み期間中も、ショートステイに。家族を支えて頑張っている療育センターがあったことは地域的に助かった。

実際に子どもに会うと分かること

- ・小 1 担任だったので、オンラインでは分からない子どもの姿が、実際に会うと分かることがある。
- ・オンラインだとミュートにしてもらうので、直接会うと先生の言葉に「あー」とか先生を呼んだりとか、こんなに声出す子だったと分かる。画面だけ見ていると、興味なくて顔をそらしていると思っていたら、向きたい方向に向けないぐらい緊張の強い子だった。直接会うから分かる。
- ・オンラインの時はまじめな顔しか見えてなかったが、学校に来ると、確かに授業中はすごく真面目（全部情報を吸収しようとしている）だが、授業が終わった後はずっとニヤニヤしている。余韻に浸っていた（「楽しかったね」と言うとニヤニヤする）。しかし、そういう姿はオンラインの時に本当に分からなくて、この子こんなに余韻に浸れる子なんだと分かった。マスク越しでしかコミュニケーションしていないから、先生の顔をどれだけ認識しているかと思ったら、違う先生が関わって水分を飲もうとすると、泣いた。

教師の話し合いができない

- ・詰め込みで、小 1 も 15 時 35 分下校を月曜日から金曜日まで、夏休みの 7 月 20 日から 8 月もずっとやっていた。私たちは夏休みにケース会や評価会など、教師同士で子どもの話をたくさんするのだが、15 時半までめいっぱい子どもがいて、授業準備もしなくてはならず、子ども下校後に消毒などをすると 16 時過ぎになってしまう。混雑を避けるための時差勤務もあり、16 時に帰る先生もいる。そうすると、本当に話し合いができない

転校もできない

- ・リハビリ入院をよくする子たち。1~2 か月する子が結構いるが、今までだと義務教育なので、病院先に転校ができた。しかし、コロナを理由に一切転校を受け入れなくなったので、リハ入院している間、授業が全く受けられない状況になった

感染者が出ると

- ・4 月、(近隣の) 小学校の保護者が感染し、7 月、本校の子どもの兄弟が濃厚接触者となり、自宅待機になった。(別の学校では) 保護者は入院。母子家庭で、その子と犬との暮らし。感染が広まってきているなという実感をもっている。
- ・近隣で感染が増えたときにはすごくピリピリしていた。福祉施設でクラスターが出て、死亡例が出たりして、学校ではピリピリした空気が漂っていた。休校期間中もかなり制限されていたようで、実際に「学校は何もしてくれなかった。」といった声が上がって、教員の中ではショックを受けたり、保護者との関係がぎくしゃくしたり、若い先生がやる気をなくしてしまうようなこともあった。なかなか厳しい状況だったんだなと思った
- ・所長さんを中心に、意識的に学校の先生が応援に行った時には保護者に「学校の先生が来てくれると表情が違うね。」や「すごく楽しそうだったよ。」と丁寧に伝えてくれた。保護者も「今日は何先生が来たの？」と事業所に聞

くようになったりとか、そういうつながりを事業所が主体となって作ってくれた。事業所がえらかった。

学校：こんな楽しいところがあるんだよ

・DVDは作って配った。学習の保障というか、学校のことを忘れないでほしいという気持ちからだった。あなたたちがつながる社会の一部として学校が、こんな楽しいところがあるんだよということを忘れないでほしいと考えて作って配った。画面上では分からないことが実際の教室では分かるというのはすごく大きい。

・学校で何か先生たちが楽しいことをするという時に、誰かがふっと面白そうに見ると、みんなが一斉に見たりとか、追いつかなくてもそっちの方が気になるとか、誰かが笑い出すとみんなが楽しくなるとか。その場の空気がながれのようなものができたりなど。それは、笑顔として出なくても、その子の隣に座っている先生だからこそ肌で感じるところがある。

先生や仲間と“いっしょに学ぶ”ことの価値

・学びの保障、学びの個別化ということでICT環境を整えることがあがっているが、「オンラインでわからないことが、会うとわかる」と言っておられたように、ICTでは置き換えることのできない学びが学校にあること、先生や仲間と“いっしょに学ぶ”ことの価値の大きさを痛感した。

・子どもは人を介してモノ（対象）とかかわる。モノとかかわりながら、大人を振り返ってみて、それを受け止め「そうだね」と言ってくれる人がいないと子どもの心に残る学びにならない。“いっしょに学ぶ”場において、自分もやってみたいという雰囲気や空気があって、自分の心が動いたことを、周りに受け止めてくれる人がいて、意味づけてくれることが重要。三項関係のなかでこそ子どもにとって価値のある学びが成立するのではないか。そうした学びをICTで置き換えることができるとして、ICTの活用、個別化、家庭学習へとどんどん進むことに危惧を感じる

・教室の「楽しい空気」「空気の流れ」「空気がまとまる」と表現しておられたが、特に言葉をまだ持たない感覚・運動期の発達段階の子どもたちにとって、学校という“いっしょに学ぶ”場の空気感や雰囲気、表情や直感といったことが、教育において非常に重要なのだと思った。

・「学校以外のところで子どもがどうなっているか」について、学校が無関心になりつつあるのではないかという指摘は、強烈的な政策的意図をもって作られていると感じる。大学で学生に出会うと、子どもたちに対する共感はずごくもっている世代だと感じる。ところが、学校が保護者の住所録作るな、年賀状も出すなという動きの中で、学校が狭い意味でのインストラクション、教科指導だけに傾いていくのではないか。

コロナバッシングと障害者問題

・バッシング問題が鳥取県内では大きな動きとしてあった。感染者の方が実名を出してブログで受けた被害を語られた。やはり出回っていた話は大半がデマだった。悪意に満ちた怪しいデマで、かなり広がっている。

・（鳥取以外。）中学部生徒の兄の学校でクラスターがおきて、大きく報道された。兄は濃厚接触者として指定をされ、出席停止になった。その妹が本校に来ているということで、その対応をどうするかと考えた。本当に分からなかった。

・障害者に対する差別と、コロナの問題での人権問題、バッシングというのは強い共通性を感じる。障害者施設ができる時、近所から反対運動が起きることがある。偏見と誤解に基づくものが。本来被害を受けている人を攻撃する。障害者問題にかかわる者として強く危機感をもっている。経済的に苦しくなってきたり、就職問題が厳しくなってきたり、社会保障が立ちいかなくなってくるとか、社会保障や福祉にお金をかけるとは何だとか、養護学校の奴らはスクールバスにただで乗っているぞとか、就学奨励費たくさんもらっているとかを攻撃されることが起きてきそうな気がする。障害児教育関係者は備えが必要かなと思っている。

・自粛ポリスもあるという話もある。そういう行動をされる方も不安なのではないか。不安が攻撃に出るというか。今の世の中は不安である。私も身近で感染された方があり、1 カ月ほど前に PCR 検査を受けた。その結果が出るまでに子供の発達検査などもしていたので、万が一を思ったときに、大変申し訳ないと思うし、職場でも「第 1 号かと思いました」と言われた。

きょうされんメッセージ

・きょうされんの声明がある。その中に、仲間の人たちにも困ったことがないか、あればぜひ職員に相談してくださいというメッセージを出し、職員の人たちに対しても、仲間の生活を守ることと、自分の家族を守ることの間で板挟みになって大変な思いをしている人いませんかということが語りかけられていた。施設の責任者に対しても、施設の経営と職員と仲間を守ることとで孤立していませんか。もしそういうことがあればきょうされんの支部や役員、あるいは本部に、必ず相談に乗るから相談してくださいということが書いてあった。全障研の声明はそれはそれで意味があるのだが、少し角度の違うものとして、この声明に学ぶことが大きいと思う

・発達障害で、顔に何かつけるなんてとんでもないという感覚過敏の子たちが、結構マスクができていたという話があった。エビデンスがはっきりあるわけではないが、子どもたちも不安なんじゃないかと思った

・(身近に) 感染した子もいて、ずいぶんバッシングに苦しんだなと思いつきながら聞いていた。バッシングしていた側の不安だが、中身を知ることが必要ではないか。福祉の仕事で、自分が感染すると仕事がどうなるんだとか、毎日神経をすり減らして家に帰ってきて、シャワーをすぐ浴びさせてとか。バッシングしてしまう側も非常に疲弊していた。

・背景にはトリアージの問題がある。命の選別の問題。バッシングしている側だけではなく、我々みんなが囚われている「排除の論理」「正義の名の下に」と書いてあるが、こうなれば大丈夫だとならない。ずっと不安だが、少しずつでも踏みとどまってくれる力をつけてくれているのではないか、支え続けられないといけないのではないか。

4. 事後、鳥取支部での議論

一斉休校の功罪を明らかに

・鳥取は比較的休校が少なかったが、全国的には 3 カ月の休校。それをなかつたことにできない。ブレイディみかこさんが、3 カ月の休校期間が子どもに残ると言っている。それがどういうふうに残るのかを考えないといけない。一斉休校の問題は、功罪をはっきりさせないといけない。

学校のあり方が問われている

・学校のあり方が問われている。保護者と学校が共同で何かするという基礎がなくなりつつある。人間的なつながりを嫌う感じがある。少し前は、家庭に踏み込むことが好意的にとらえられた。今は非常識にとらえられる。

・コロナで大人側の価値観がゆさぶられている。大学がオンラインになっていたら大学に通わなくていいよねと言うとか。マスクをしていることが長くなったので、マスクをとることが恥ずかしいというようになり。発達観や療育感が変わらないか危惧する。職場世論が重要になってくる。

・「個別最適化」の思想。個人の学びを進めることがメインとなっている。

・学校は君らを待っているというメッセージを出すところ。行きたいと思える場所、愛されているという感覚。教師もそれが喜びになっている。それがいい中で ICT や個別最適化と言われている。正面から押し返す議論が必要。

・休校を決めるのは地方自治体教育委員会とか学校長のはず。

・一斉の学校休校は、恐怖を植え付けられた。根拠のない中で恐怖感ばかりをかき立てられた。ウイルスに対する

国民意識に恐怖を植え付けられた。

- ・教育における三項関係の観点も取り入れていきたい。教育と学習の違い。教育の危機は始まっている。ある程度敷かれていた土壌にコロナが来て、一気に進んでいく。

- ・バッシング問題はもう少し深めたい。障害者問題と深く関係してくると思う。誤解に基づく偏見や差別はずっと行われてきた。

障害者問題とバッシングの関連

- ・障害者年金や通学バスなどはたたかれるのではないかと。養護学校何でそんなに教員がいるんだとか。対立ではなく、分かりあえることが必要。

- ・自衛警察とかも。(私は障害があるが)、障害者駐車場に止めると、「本当に障害者か」と勢いよく言われる。

- ・バッシングは私の周りがすごい。鳥取で出始めたときに、どの地区で出たから、その地区の人は学校に来るなど言われる人がいた。根本には不安や恐れがあるのを感じた。攻撃することで安心感を得ているような雰囲気。感染者が際立つが故の怖さがあった。

- ・東京のように感染者が多くても、似たようなことは言われていた。情報管理統制すればするほど、デマはひどくなると言われている。全部が全部うその情報ではないというのが困ったところ。

- ・(今回の研究会で) 職場だけでなく仲間がいることがすごく大事と分かった。流されそうにもなるが、「間違っていないよ」「そんなことはやめなさい」と言われることは重要だと思った。